

# サッカーの体育授業を取り組む中で 第2報

— 経験者と非経験者の比較 —

## Soccer as Physical Education Program (2)

— A Comparison of the between experienced and non-experienced person —

宮 辻 和 貴\*  
間 瀬 知 紀\*\*  
加 藤 大 門\*  
木 内 真 弘\*\*\*  
木 谷 織 信\*\*

### I. はじめに

サッカー競技において国際的統括団体であるFIFA (Federation Internationale de Football Association ; 国際サッカー連盟) に加盟している国と地域は200余りに達し、サッカーは全世界で約2億4000万人がプレーする人気が高いスポーツである<sup>1)</sup>。日本国内においては1993年にJリーグが発足し、サッカーのプロ化に伴い国内の競技レベルは著しく向上し、ワールドカップやオリンピック等の国際大会に連続出場する機会を得ている。Jリーグの発足はサッカーの普及のみならず競技人口の増加<sup>2)</sup>による底辺の拡大につながっている。サッカーの人気は高く、競技人口の増加は、なかでも中学生、高校生の若年層にも波及している。また、サッカーは体育授業の教材として取り扱われ、学校教育過程で多くの児童、生徒がサッカーを経験する機会がみられる。大学体育授業においても、多くの選択種目の中からサッカーを選択する学生は多く、サッカーの人気が高いことが伺える。

サッカーは、足でボールを操作するといった競技特性があり、ボールコントロール等の基本技術の習得に対する課題は大きい。さらに、ゲームにおいては状況に応じた技術と戦術の影響は大きく、ルールに則った範囲内で技術と戦術が実践されなければならない。体育授業の教材としてサッカーを考えた場合、課外活動等でサッカー経験がない一般学生とサッカー経験がある学生の技術および戦術やルールに対する認識には差異が大きい。松原<sup>3)</sup>らは、一般学生とサッカー部員を対象としたルール認識に関する質問紙調査を実施し、サッカー部員におけるルールの認識度が高いことを報告している。著者らは、サッカー授業の実践において、ゲーム

\*発達教育学部 非常勤講師 \*\*関西大学非常勤講師 \*\*\*発達教育学部 ジュニアスポーツ教育学科

中のプレーが中断する場面にたびたび直面している。さらに、先行研究<sup>4)</sup>では、ゲーム中の中断が受講者のプレー再開方法（ルール）を認識していないことが影響していると考え、プレー中断後のプレー再開方法に着目し、「ゴールキックおよびコーナーキック」、「スローイン」、「オフサイド」等に関するルールテストを実施し、受講者のルールに対する認識度について検討した。その結果、サッカールールの認識には、過去のサッカー経験が大きく影響し、ルールの認識がプレー中断後のプレー再開にも影響していることを報告した。

この先行研究の結果から更なるルールの認識に関する調査の必要性を感じ、「競技フィールドの名称」、「得点」および「直接・間接フリーキック」等について、受講者がどれぐらい認識しているのかを明らかにする必要がある。また、サッカー授業の展開において履修者がルールをどれぐらい認識しているかを明らかにすることで、ルール指導の位置づけを明確にしたいと考えた。

そこで本研究は、サッカー授業を履修している学生を対象として、ルールに関する認識をサッカー経験の有無により検討するとともに、今後の授業実践時におけるルール指導の在り方についての基礎資料を得ることを目的とした。

## II. 方法

### 1. 対象者

本研究の対象者は、大阪府下の大学3校に在籍し、一般体育授業におけるサッカーを履修している男子学生280名（年齢 $19.0 \pm 0.7$ 歳）であった。

対象者を中学校、高等学校在学時における課外活動でのサッカー経験の有無により、中学校、高等学校のいずれかでサッカーを経験した群（以下：経験群  $n=157$ ）と中学校、高等学校とサッカーを経験していない群（以下：非経験群  $n=123$ ）とした。

なお、経験群における経験年数は2～12年（平均 $7.8 \pm 2.7$ 年）の範囲内であった。

### 2. 調査方法と調査内容

調査に関しては、三村<sup>6)</sup>が作成したルールテストの中から「競技フィールドの名称」、「得点」、「直接・間接フリーキック」に関する設問を用いて実施した（資料1参照）。

このルールテストは、FIFAのサッカー競技規則<sup>5)</sup>に基づき作成されている。本調査を実施するにあたり、対象者に調査の目的および内容などを十分に説明した上で、授業時に質問紙を配布し回答させ、その場で回収した。

### 3. 統計処理

統計処理には、統計解析ソフトSPSS for Windows ver.11.5Jを用いた。なお、経験群と非経験群の2変数間の有意差検定については、対応のないt検定（1サンプルのt検定）を行い、

また、クロス集計における回答の比率の検定には、 $\chi^2$ 検定を用いた。いずれも危険率5%未満をもって有意と判定した。

### Ⅲ. 結果

#### 1. 競技フィールドの名称について

「競技フィールドの名称に関する問い」に対する回答を、経験群、非経験群間で比較した有意差検定結果を表1に示した。

表1. 競技フィールドの名称について

問題 1	経験群 % (n)	非経験群 % (n)	合計 % (n)	有意差
① タッチライン 正解 不正解	73.9 (116) 54.5 (41)	54.5 (67) 45.5 (56)	65.3 (183) 34.6 (97)	*
② ゴールライン 正解 不正解	71.3 (112) 28.7 (45)	63.4 (78) 36.6 (45)	67.9 (190) 32.1 (90)	*
③ ゴールエリア 正解 不正解	86.6 (136) 13.4 (21)	82.1 (101) 17.9 (22)	84.6 (237) 15.4 (43)	*
④ ペナルティエリア 正解 不正解	91.7 (144) 8.3 (13)	87.0 (107) 13 (16)	89.6 (251) 10.4 (29)	*
⑤ ペナルティキックマーク 正解 不正解	93.6 (147) 6.4 (10)	87.0 (107) 13.0 (16)	90.7 (254) 9.3 (26)	*
⑥ ペナルティアーク 正解 不正解	73.3 (115) 26.8 (42)	61.8 (76) 38.2 (47)	68.2 (191) 31.8 (89)	*
⑦ ハーフウェイライン 正解 不正解	56.7 (89) 43.3 (68)	61.8 (76) 38.2 (47)	50.7 (142) 49.3 (138)	
⑧ センターサークル 正解 不正解	94.9 (149) 5.1 (8)	88.6 (109) 11.4 (14)	92.1 (258) 7.9 (22)	*
⑨ センターマーク 正解 不正解	45.2 (71) 54.8 (86)	56.9 (70) 43.1 (53)	50.4 (141) 49.6 (139)	
⑩ コーナーフラッグポスト 正解 不正解	94.9 (149) 5.1 (8)	91.1 (112) 8.9 (11)	93.2 (261) 6.8 (19)	
⑪ コーナーアーク 正解 不正解	49.7 (78) 50.3 (79)	44.7 (55) 55.3 (68)	47.5 (133) 52.5 (147)	
⑫ ゴールポスト 正解 不正解	89.8 (141) 10.2 (16)	88.6 (109) 11.4 (14)	89.3 (250) 10.7 (30)	
⑬ クロスバー 正解 不正解	55.4 (87) 44.6 (70)	50.4 (62) 49.6 (61)	53.2 (149) 46.8 (131)	

\*p<0.05

「タッチライン」、「ゴールライン」、「ゴールエリア」、「ペナルティエリア」、「ペナルティキックマーク」、「ペナルティアーク」、「センターサークル」などは、回答の比率に有意差がみられ ( $P<0.05$ )、経験群において「名称に関する認識」が高いことが認められた。また、回答別で見ると、「ゴールエリア」、「ペナルティエリア」、「ペナルティキックマーク」、「センターサークル」において両群ともに8～9割の正解率であった。

注目すべき点として、「タッチライン」および「ゴールライン」における経験群、非経験群の比率は、それぞれタッチラインが74%、55%、ゴールラインが71%、63%であり、「名称に対する認識」が低いことが示された。

## 2. 得点について

表2に「得点に関する問い」に対する回答の比率を、経験群、非経験群間で比較した有意

表2. 得点について

問題 2	経験群 % (n)	非経験群 % (n)	合計 % (n)	有意差
① スローインが直接相手ゴールに入った 正解 不正解	75.2 (118) 24.8 (39)	67.5 (83) 32.5 (40)	71.8 (201) 28.2 (79)	*
② スローインが直接自ゴールに入った 正解 不正解	54.1 (85) 45.9 (72)	46.3 (57) 53.7 (66)	50.7 (142) 49.3 (138)	
③ キックオフが直接相手ゴールに入った 正解 不正解	81.5 (128) 18.5 (29)	55.3 (68) 44.7 (55)	70.0 (196) 30.0 (84)	*
④ 間接フリーキックが直接相手ゴールに入った 正解 不正解	92.4 (145) 7.6 (12)	80.5 (99) 19.5 (24)	87.1 (244) 12.9 (36)	*
⑤ 間接フリーキックが、ゴールキーパーの 指に当たって相手ゴールに入った 正解 不正解	76.4 (120) 23.6 (37)	65.9 (81) 34.6 (42)	201 (71.8) 28.2 (79)	*
⑥ 間接フリーキックが、主審に当たって 相手ゴールに入った 正解 不正解	73.2 (115) 26.8 (42)	64.2 (79) 35.8 (44)	69.3 (194) 30.7 (86)	*
⑦ 直接フリーキックが直接自ゴールに入った 正解 不正解	7.0 (11) 93.0 (146)	8.1 (10) 91.9 (113)	7.5 (21) 92.5 (259)	
⑧ ゴールキーパーのバントキックが、 直接相手ゴールに入った 正解 不正解	85.4 (144) 14.6 (13)	91.9 (113) 8.3 (18)	88.9 (249) 11.1 (31)	
⑨ コーナーキックが直接相手ゴールに入った 正解 不正解	95.5 (150) 4.5 (7)	96.7 (119) 3.3 (4)	96.1 (269) 3.9 (11)	
⑩ ゴールキックが直接相手ゴールに入った 正解 不正解	61.8 (97) 38.2 (60)	67.5 (83) 32.5 (40)	64.3 (180) 35.7 (100)	*

\* $p<0.05$

差検定結果を示した。

「スローインが直接相手ゴールに入った」、「キックオフが直接相手ゴールに入った」、「間接フリーキックが直接相手ゴールに入った」、「間接フリーキックが、ゴールキーパーの指に当たって相手ゴールに入った」、「間接フリーキックが主審に当たって相手ゴールに入った」、「ゴールキックが直接相手ゴールに入った」などについては、回答の比率に有意差が認められ ( $P<0.05$ )、経験群におけるプレー再開時に関する「得点についての認識」が高かった。

### 3. 直接・間接フリーキックについて

「直接・間接フリーキックの問い」に対する回答の比率について、経験群、非経験群間で比較した有意差検定結果を表3に示した。

「ファウルタックル」、「ジャンピングアット」、「トリッピング」、「ゴールキーパーが味方のスローインをキャッチした」などは、回答の比率に有意差がみられ ( $P<0.05$ )、経験群において「直接・間接フリーキックに関する認識」が高いことが認められた。

表3. 直接・間接フリーキックについて

問題3	経験群 % (n)	非経験群 % (n)	合計 % (n)	有意差
① 相手のボールを奪おうとタックルし、 ボールにさわる前に相手の体にふれた 正解 不正解	83.3 (130) 16.7 (26)	66.7 (82) 33.3 (41)	76.0 (212) 24.0 (67)	*
② 相手に飛びかかった 正解 不正解	86.0 (135) 14.0 (22)	74.0 (91) 26.0 (32)	80.7 (226) 19.3 (54)	*
③ 相手の顔の近くまで足を上げた 正解 不正解	47.1 (74) 52.9 (83)	48.0 (59) 64.2 (64)	47.5 (133) 52.5 (147)	
④ 相手の足を引っかけて転ばせた 正解 不正解	86.6 (136) 13.4 (21)	71.5 (88) 28.5 (35)	80.0 (224) 20.0 (56)	*
⑤ ボールが近くにないのに、体を接触させ ないで相手の進路を妨害した 正解 不正解	64.3 (101) 35.7 (56)	58.5 (72) 51 (41.5)	61.8 (173) 38.2 (107)	
⑥ 相手にツバを吐きかけた 正解 不正解	38.8 (61) 61.2 (96)	43.9 (54) 56.1 (69)	41.1 (115) 58.9 (165)	
⑦ ゴールキーパーが味方のスローインを キャッチした 正解 不正解	84.7 (133) 15.3 (24)	83.3 (84) 31.7 (39)	77.5 (217) 22.5 (63)	*
⑧ ボールに寄ろうとした相手を手で押さえつけた 正解 不正解	68.8 (108) 31.2 (49)	65.0 (80) 35.0 (43)	67.1 (188) 32.9 (92)	

① ファールタックル ② ジャンピングアット ③ デンジャラスプレー

④ トリッピング ⑤ オブストラクション ⑥ スピットイング

⑦ 名称無し ⑧ ホールディング

\* $p<0.05$

#### IV. 考察

##### 1. 競技フィールドの名称

競技のフィールドは、長方形の形によりラインでマークしなければならないと定められている。ラインは、長い方の2本の境界線と短い方の2本の境界線で仕切られたエリアがフィールドである。そして、長い方のラインを「タッチライン」、短い方のラインを「ゴールライン」という。また、ゴールは短い方のラインの中央に位置している。例えば、国際試合や国内のJリーグおよび高校、中学校、小学校などの大会では、フィールドの大きさに違いはあるものの、少年、青年および成人の年代問わず、ラインによってマーキングされたフィールドで試合が行われる。競技のフィールドの境界線およびエリアの名称には役割があり、ゲーム中におけるプレー開始、再開などゲームを円滑に展開する上で重要である。

まず「タッチライン」、「ゴールライン」は、経験群において「タッチライン」および「ゴールライン」の名称に対し認識が高いことが伺えた。サッカー経験をしていない受講者は、学校体育の授業ではフィールドに境界線が描かれていない状況で試合が行われたためではないかと思われる。その理由として、グラウンドを多目的に使われることもあり、境界線が描かれていないフィールドに境界線に変わるマーカーを使って「タッチライン」、「ゴールライン」の代わりにし、ゲームを実施するためである。特に、「タッチライン」<sup>7)</sup>の名称は、サッカーが競技として発足した時期に遡り、ボールを最初に触れたプレーヤーがボールを投げ入れることから、長い方の境界線を「タッチライン」と名付けられたことに由来する。「タッチライン」という名称の由来に対する知識不足と、同時に学校教育での授業時に、ライン無しの状況のもとで授業が行われていることが要因ではなかろうか。

「センターサークル」は、ハーフウェイラインの中央にセンターマークを中心にサークルが印されている。両群においては、認識が高かった(約9割)。しかし、経験群、非経験群の正解の比率に明らかに相違がみられ、経験群の「センターサークル」における名称の認識が高いことが示された。しかし、非経験群は、語群に「センターサークル」と明記されており、「センターサークル」と記載されていなかったことから、他の名称を選択したことが考えられる。

次に、各ゴールは、ゴールラインの中央に設置されている。そのゴール付近には、複数のラインで囲まれた「ゴールエリア」、「ペナルティエリア」、ペナルティエリア内でマーキングされた「ペナルティキックマーク」、ペナルティエリアの外にペナルティキックマークを中心にラインでサークルが描かれてエリアを「ペナルティアーク」などの名称がある。これらの名称については、経験群の方が非経験群より認識が高いことが示された。また、両群ともに、「ゴールエリア」、「ペナルティエリア」、「ペナルティキックマーク」などは、全体の8割以上を占めていた。しかし、前途の正解の比率より「ペナルティアーク」の名称について、経験群、非経験群における認識は、6～7割と低かった。このことは、非経験群において、「ゴールエリア」、「ペナルティエリア」は、ゴール前にあるエリアの違いを認識していないといえる。また、「ペ

ナルティアーク」は、ペナルティキックが行われるためだけに必要であり、中学、高校時の体育授業において「ペナルティアーク」の境界線が引かれていない状況でゲームを実施している可能性が高く、回答に対して大きく影響していると思われる。

この「競技フィールドの名称」の問いの中でも、気になる回答として「ハーフウェイライン」「コーナークック」などの名称に対する認識が低い傾向にあった。

さらに、「競技フィールドの名称に関する問い」に対する回答を「正解」した場合に1点、「不正解」であった場合に0点とする2段階に得点化し、合計を13点とした。「競技フィールドの名称」に関する問題の合計得点に対し、経験群、非経験群の間で比較を行った(図1)。その結果、経験群 $9.77 \pm 2.10$ 点、非経験群 $8.99 \pm 2.39$ 点となり、経験群の方が非経験群より有意に高い値がみられ( $p < 0.05$ )、「競技のフィールドの名称に関する認識」が高いことが認められた。

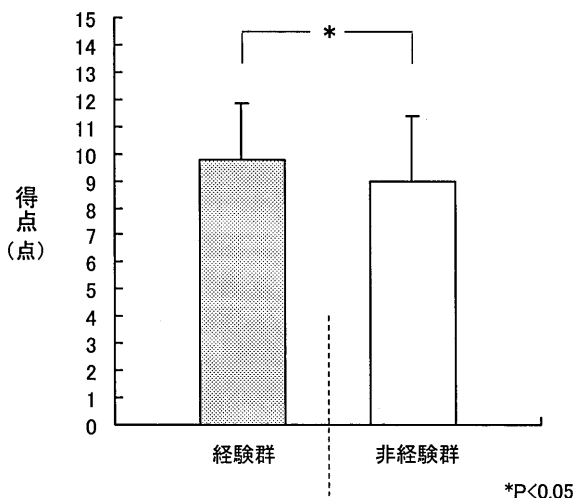


図1. 競技フィールドについて

## 2. 得点について

サッカーは、ゲームで得点するためにドリブルやパスなどのボール操作で相手コートに侵入し、シュートを放ち得点の機会を作りだすことが重要となる。ここでは、ゲームが進行中(インプレー)での得点ではなく、ゲーム中に違反行為あるいはボールがフィールドの外に出てプレーが一旦中断される場面(アウトオブプレー)があり、プレー再開方法として、「スローイン」、「キックオフ」、「フリーキック」、「ゴールキック」および「コーナークック」などがある。その後、多様な再開方法でインプレーになる。その場合の状況のもとで得点が認められるのかを問うものである。

まず初めに、フィールドの外から「スローインが直接相手ゴールに入った」場合について取り上げる。この問いに対し、経験群において「スローインが直接相手ゴールに入った」という

認識は高い。果たして授業で行われるゲームで、「スローイン」からの得点はあるのだろうか。スローイン（第15条）<sup>5)</sup>は、フィールドの外からボールを手で投げ入れる行為であり、学校教育のサッカー授業において、「スローイン」の動作について十分に説明していると思われる。この問いのような状況が本当に出現するのであろうか。ゲーム中において「スローイン」を相手ゴール前まで投げられる受講者がいるかもしれない。つまり、直接相手ゴールに入ることも考えられなくもない。正解は、相手ゴールに対し「スローイン」のボールが直接ゴールに入った場合は、「得点」として認められない。このような場面が現れる可能性は否定しがたい。したがって、非経験群において、「スローイン」からの得点か否かという問いに対する認識を高めておく必要があるといえよう。

キックオフ（第8条）<sup>5)</sup>はプレーの開始あるいは再開する方法の一つである。「キックオフが直接相手ゴールに入った」時に得点か否かという問いである。非経験群は「キックオフ」に対する正解の比率が55%と少なく、経験群に比べ低い認識であることが示された。現行の「キックオフ」の進め方として、『ボールはけられて前方に移動したときインプレーとなる』と記載<sup>8)</sup>している。正解としては得点である。それまでの「キックオフ」<sup>9)</sup>に関する競技規則では、『ボールがその外周の長さだけ移動するまでは、インプレーとはみなさない』と明記している。つまり、プレーの開始では「間接フリーキック」であるため、「キックオフ」から得点できないことを意味している。これまでの「キックオフ」の方法で競技のプレー開始と認識しているためであろう。今後、体育授業において「キックオフ」に対する説明が必要である。

次に、「間接フリーキックが直接相手ゴールに入った」、「間接フリーキックが、キーパーの指に当たって相手ゴールに入った」、「間接フリーキックが、主審に当たって相手ゴールに入った」などの問いについては、経験群において高い認識であることが伺えた。フリーキック（第13条）<sup>5)</sup>は、直接あるいは間接の2つに分けられる。文中に「直接」という言葉が説明されており、誰にもさわらずという意味として表現している。ここでは、設問の文中に「直接」、「間接」から再開された場合に、「得点と認められる」、「得点と認められない」を選択する問いである。「間接フリーキックが相手ゴールに直接に入った」場合、両群において正解した受講者は8割以上の者が存在した。「得点」は認められないという認識が得られていることが伺えた。しかしながら、経験群よりも非経験群の方が低い認識の理由として、設問の文中を熟読されていないためではなからうか。続いて、「間接フリーキックが、ゴールキーパーの指に当たって相手ゴールに入った」の問いに対する回答は、得点である。経験群において4人中3人が認識していることがみられるが、サッカーを継続している受講生として正解の割合に物足りなさを感じられる。また、非経験群の正解の比率は65%以上の受講者が存在した。これは認識していることを示しているが、前途の問いと同様に設問文を熟読されていないことが影響している。つまり、この正解の割合が高いか、低いかを判断することは大変難しいと言えるだろうが、言い換えれば、設問文を熟読していないということが推測できよう。



上述の「間接フリーキックが、ゴールキーパーの指に当たって相手ゴールに入った」の問いとは異なり、味方あるいは相手に当たった場合と「間接フリーキックが、主審に当たって相手ゴールに入った」場合の状況に違いがある。ここでの正解は、「得点」が認められない。「間接フリーキック」から得点するためには、フリーキック後、味方プレーヤーまたは相手プレーヤーが、ボールにさわらなければならない。つまり、審判員は除かれるのである。ゲーム中に審判員にあたり引き続きプレーが続けられる場合がある。したがって、非経験群において、プレー中に偶然審判員にあたった状況と同じであると認識しているように思われる。

ゴールキック（第16条）は、プレーを再開する一つの方法である。「ゴールキックが直接相手ゴールに入った」場合、相手チームのゴールに、ゴールキックから直接得点することができると明記<sup>5)</sup>している。「ゴールキックから直接相手ゴールに入った」の問いに対し、経験群、非経験群の正解の比率に明らかな相違がみられた。唯一、非経験群は経験群に比べ認識が高かった。経験群の受講者は正規のフィールドでゲームを行っている状況のもとでは、「ゴールキックから直接相手ゴールに入った」場面がほとんど見受けられない。したがって、「ゴールキック」からの再開は「間接」という誤った認識が大きく影響しているのではなかろうか。

しかしながら、「直接フリーキックが直接自ゴールに入った」の問いに対し、両群において最も正解の比率が低い傾向にあった。「得点」と認められないという回答した受講者は全体の8%と1割に満たなく、低い認識であることが示された。直接フリーキック<sup>10)</sup>から直接得点できるのは、相手ゴールに対してだけで、ミスキックや強風の影響でフリーキックが自ゴールに入っても相手チームの得点とはならない。ゲーム中に味方ゴールに味方プレーヤーがOWN・ゴールと勘違いしたことによる認識の相違が影響したと思われる。

また、「得点に関する問い」に対する合計得点を検討した。「得点に関する問い」に対する回

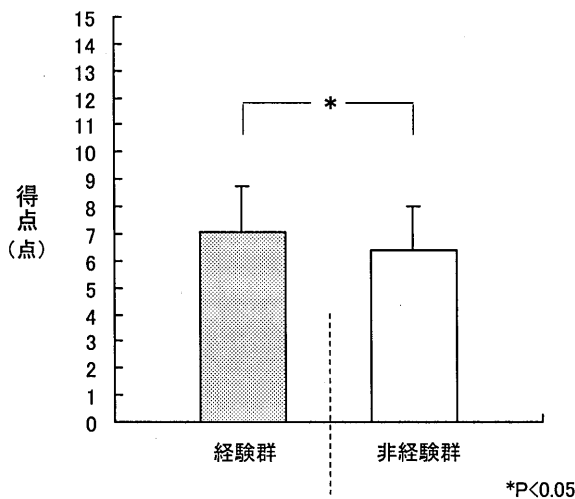


図2. 得点について

答を「正解」した場合に1点、「不正解」であった場合に0点とする2段階に得点化し、合計を10点とした。「得点」に関する問題の合計得点に対し、経験群、非経験群の間で比較を行った(図2)。その結果、経験群7.09±1.63点、非経験群6.77±1.63点となり、経験群の方が非経験群より有意に高い値が認められ( $p<0.05$ )、「得点に関する認識」が高かった。

### 3. 直接・間接フリーキックについて

この問いの前に、競技規則の第12条、「ファウルと不正行為」について紹介しておきたい。「ファウルと不正行為」に関する条項<sup>5)</sup>において「直接フリーキック」、「間接フリーキック」に分けられており、ゲーム中ボールを奪い合う場面が多く見られ、主審は身体接触の行為が正当な行為あるいは過度な行為によるものかを判断し、主審がプレー中に不用意に、無謀に、過剰な力で犯したと判断した場合に「直接フリーキック」を相手チームに与える。つまり、ファウルの内容によって、フリーキックが「直接」あるいは「間接」で再開される。特に競技の試合において、審判員はプレーヤーが負傷など危険にさらされることなく、ゲームをコントロールすることを目指している。一方、学校教育の授業においては、サッカーに必要な技術や戦術の習得やゲームで技能が発揮されることをねらいとし、ゲーム中のボールの奪い合いによる怪我が起こる可能性が高くなると予測できる。そのため、学校教育課程の授業では、怪我を未然に防ぐための指導が行われている。

ここでは「直接フリーキック」について検討したい。「相手ボールを奪おうとタックルし、ボールにさわる前に相手の体にふれた(以下、ファウルタックル)」、「相手に飛びかかった(以下、ジャンピングアット)」、「相手の足を引っかけて転ばせた(以下、トリッピング)」の問いについては、経験群において高い認識にあった。「ファウルと不正行為」の条項には、10項目の直接フリーキックがある。この「直接・間接フリーキック」の設問数は、6項目が出題されている。なかでも「ファウルタックル」、「ジャンピングアット」、「トリッピング」の問いに対し、経験群の受講者において正解の割合は8割以上を占めていた。これらの行為は、主審が判断した場合と記している。ただし、この判断は主審の裁量に任されているため、主審の判断が大きく左右するのではなかろうか。経験群の受講者においては、主審がどのような判断基準でファウルをとるかというより、これらの行為を「直接フリーキック」であると認識していることがみとれる。

一方、非経験群において「ジャンピングアット」、「トリッピング」の問いに対し、正解した受講者は7割を超えていた。「ジャンプして体当たり、あるいは相手にとびかかる」、「相手をつまづかせたり、つまづかせようとする」などの行為を「直接フリーキック」と認識していることが示された。それに対して、「ボールにさわる前に身体にふれる」行為の認識については、6割台であった。これらの「直接フリーキック」に関する問いに対し、危険な行為である「ジャンピングアット」、「トリッピング」、「ファウルタックル」の用語に対する認識に差がみ

られた。果たして、学校教育における体育授業で身体接触に伴う危険性の高い行為について説明しているのだろうか。今後、ゲーム中において危険性の高い行為について、怪我を防ぐためにも認識を高める指導が必要と思われる。

これまでは直接フリーキックについて述べた。次に、間接フリーキックの問いである「ゴールキーパーが味方のスローインをキャッチした」に対し、経験群、非経験群の正解の比率の間には有意な差がみられ、経験群において「間接フリーキック」という認識が高かった。また、正解の割合は、全体の約8割未満の受講者が認識していることが伺えた。経験群の受講者においては、学校での課外活動における監督やコーチなどの指導の表れであろう。

一方、非経験群の受講者の認識は、7割未満であった。ゲームの進行上、スローインからの再開であっても、相手ゴールにボールを運ばなければいけない。果たして、ゲームにおいて「ゴールキーパーにスローイン」しようとする行為は、実際に起こりえるのであろうか。例えば、味方にスローインしたときに、キーパーが間接的にボールをキャッチする可能性があるのではないだろうか。この問いについては、フィールドの大きさによって、味方のゴールキーパーにスローインすることも考えられなくはない。このような場合に備え認識を高める必要があるかもしれない。

特に、注目すべき問いとして、「スピitting」についての正解の比率が最も低い傾向にあった。「スピitting」<sup>10)</sup>は直接フリーキックである。この用語は、相手につばを吐きかける行為である。稀に国際試合で見かけるが、国内の試合ではほとんどみられない。この「スピitting」は、相手を軽蔑し見下す行為であり、下品な発言や身振りに相当し、反スポーツ的行為として退場が命じられる。経験群と非経験群を問わず、「つばを吐きかける」行為については、今後の体育授業における受講者に「スピitting」に対する認識が高められるように指導する必要がある。

次に、「デンジャラスプレー」<sup>10)</sup>とは、危険な方法でプレーを行う行為である。「相手の顔の近くまで足をあげた」行為は、相手が怪我をするおそれがある危険なプレーを意味する。例えば、ボールを蹴ることはサッカーでは正当なプレーであるが、ボールを蹴ろうとした時に相手チームの者のそばにいたりすると危険なプレーとしてファウルとなる。つまり、相手がそばにいないければ危険ではないプレーが、相手がプレーしようとしている時、相手に危険を与えかねないプレーのことを示す。この行為は「間接フリーキック」である。両群の受講者においては、「デンジャラスプレー」の認識が低い傾向にあった。すなわち、「デンジャラスプレー」の用語に対する意味と理解が得られるように指導しなければならない。

また、「直接・間接フリーキックに関する問い」に対する合計得点を検討した。「直接・間接フリーキックに関する問い」に対する回答を「正解」した場合に1点、「不正解」であった場合を0点として2段階に得点化し、合計を8点とした。「直接・間接フリーキック」に関する問題の合計得点に対し、非経験群、経験群の間で比較を行った(図3)。その結果、経験群

5.60±1.57点, 非経験群4.96±1.92点となり, 経験群において有意に高い値がみられ ( $p<0.05$ ), 「直接・間接フリーキックに関する認識」が高いことが認められた。

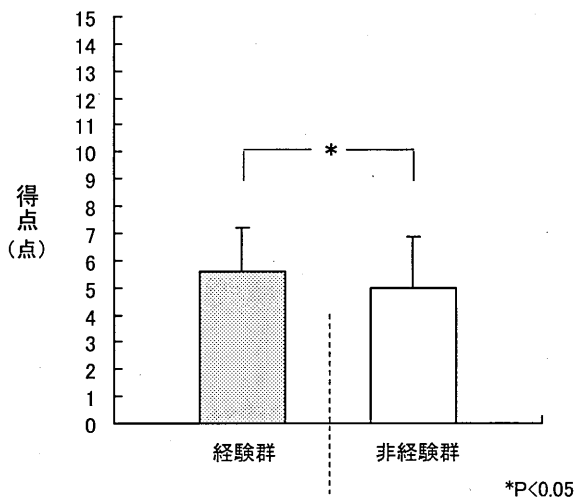


図3. 直接・間接フリーキックについて

## V. まとめ

サッカーを履修している学生を対象として, ルールに関する認識をサッカー経験の有無により検討するとともに, 今後の授業実践時におけるルール指導の在り方についての基礎資料を得ることを目的として研究し, 概ね以下の結果を得た。

1. 「競技フィールドの名称」に関する問いに対し, 経験群においてラインやエリアの名称についての認識が高かった。経験者, 非経験者において, 「タッチライン」と「ゴールライン」の名称に対する認を高める教育が必要である。
2. 「得点に関する問い」に対し, 経験群において認識が高かった。経験群においては, 「スローインが直接相手ゴールに入った」, 「キックオフが直接相手ゴールに入った」についての認識が高いことが示された。一方, 経験群では, 「ゴールキックが直接相手ゴールに入った」についての認識は低いことが示された。したがって, 得点であるか否かは「直接フリーキック」と「間接フリーキック」の違いについて, 認識を高めるために「直接・間接フリーキックに関する」説明が必要である。
3. 「直接・間接フリーキックに関する問い」に対し, 経験群において認識が高いことが伺えた。非経験群において, 「直接フリーキック」の「ファウルタックル」, 「ジャンピンワット」と「トリッピング」などについての認識は低いことが示された。したがって, これらの用語に対する説明が必要である。

このことから, 「競技のフィールドの名称」, 「得点」, 「直接・間接フリーキック」に関する

問いに対し、経験者と非経験者のルールに関する認識の違いが明らかとなった。非経験者に対し、ルールの認識の必要性とともにルール指導の働きかけが重要と考えられる。今後、サッカー競技規則が改正される場合などを考えると、学生に変更されたルールに対する認識を高める必要があると示唆された。

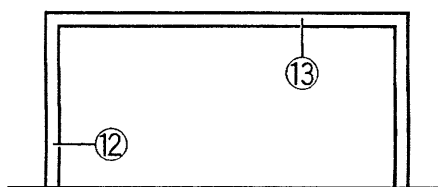
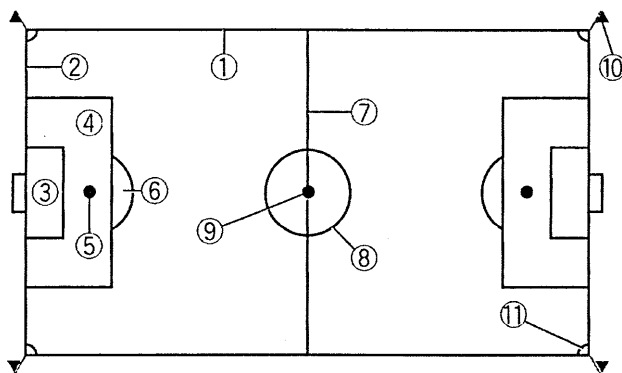
#### 参考文献

- 1) FIFA公式サイト. <http://www.fifa.com/>
- 2) 日本サッカー協会ホームページ. <http://www.jfa.or.jp>
- 3) 松原 裕・田代 力也・松本 光弘・山中 邦夫 (1993) 大学生のサッカー規則の知識に関する研究. 独協大学諸学研究. 28.1.
- 4) 見正 秀基・木谷 織信 (2010) 大学体育授業におけるサッカー規則の認識について. 追手門学院大学社会学部紀要. 第4号.
- 5) 財団法人サッカー協会 (2009/2010). サッカー競技規則. 2009. 東京.
- 6) 三村 高之 (2006). 最新サッカールールブック. 東京.
- 7) 中村 敏雄 (1992). ラクビーボールなぜ楕円形なの?. 大修館書店. 東京.
- 8) LOWS OF THE GAME (1996). サッカー競技規則. 東京.
- 9) LOWS OF THE GAME (1998/99). サッカー競技規則. 東京.
- 10) 浅見 俊雄・永島 正俊 (2002). サッカーのルールと審判法. 大修館書店. 東京.

資料 1

〔問題 1〕 図の 1～13 の名称を A～X の語群から選びましょう。

- (A) センターライン
- (B) ゴールアーク
- (C) センターマーク
- (D) ゴールライン
- (E) ペナルティエリア
- (F) タッチライン
- (G) キックオフマーク
- (H) コーナーサークル
- (I) クロスバー
- (J) ハーフウェイライン
- (K) エンドライン
- (L) ペナルティキックマーク
- (M) コーナーアーク
- (N) サイドライン
- (O) ペナルティアーク
- (P) ゴールバー
- (Q) センターエリア
- (R) センターライン
- (S) センターサークル
- (T) コーナーフラッグポスト
- (U) ハーフサークル
- (V) ゴールポスト
- (W) ゴールエリア
- (X) オフサイドライン



〔問題 2〕 次のケースで、得点（失点）となるものに○，得点（失点）とならないものに×をつけましょう。（文中の「直接」とは、誰にもさわらずにという意味です）

- ① スローインが直接相手ゴールに入った
- ② スローインが直接自ゴールに入った
- ③ キックオフが直接相手ゴールに入った
- ④ 間接フリーキックが直接相手ゴールに入った
- ⑤ 間接フリーキックが、ゴールキーパーの指にあたって相手ゴールに入った

- ⑥ 間接フリーキックが、主審に当たって相手ゴールに入った
- ⑦ 直接フリーキックが直接自ゴールに入った
- ⑧ ゴールキーパーのパントキックが、直接相手ゴールに入った
- ⑨ コーナーキックが直接相手ゴールに入った
- ⑩ ゴールキックが直接相手ゴールに入った

【問題3】 次の反則のうち、直接フリーキックになるものに×、間接フリーキックになるものに△をつけましょう。

- ① 相手のボールを奪おうとタックルし、ボールにさわる前に相手の体にふれた（ファールタックル）
- ② 相手に飛びかかった（ジャンピングアット）
- ③ 相手の顔の近くまで足を上げた（デンジャラスプレー）
- ④ 相手の足を引っかけて転ばせた（トリッピング）
- ⑤ ボールが近くにないのに、体を接触させないで相手の進路を妨害した（オブストラクション）
- ⑥ 相手にツバを吐きかけた（スピitting）
- ⑦ ゴールキーパーが味方のスローインをキャッチした
- ⑧ ボールに寄ろうとした相手を手で押さえつけた（ホールディング）